

昭和41年7月1日第3種郵便物認可
平成18年4月5日発行(毎月5日1日発行)
第41巻4月号(通巻591号)

風土



酒
中
花

神
蔵

器

それ以後の波郷桂郎酒中花咲く

白鳥の帰りし空の日々濁り

寒牡丹いのち滴る思ひかな

板ばん打つて法然院の冴返る

真砂女亡き銀座の裏の午祭

和紙のごとき雪のシエードに露の臺
冴返るルネ・ラリツクの砂時計
山焼きし闇のせり出す春の星
春満月ノアの方舟近づけり
黙読す三つ四つ五つ露のたう
あをによし「東大路」の花菜漬
真野御陵
繭ごもるごと雪椿火葬塚



竹間集

同人作品



日向ぼこ

島谷 征良

極楽に父ゐるはずと日向ぼこ
枯れきれぬ櫻の影に入りけり
三つまではさびしき数や帰り花
てつぺんの蜜柑うまさう届かずよ
辛夷の木大みぶるひをして落葉
子の勉強見てやる炬燵に正座して
お日様が何よりと母日向ぼこ

探梅

大竹 淑子

筆始短冊の天純白に
初声や瑞垣内は神の域
切株に杉の年輪年新た
東山連峰晴るる初鴉
大寒の海へ出船の水尾分かれ
わかされの虚空真青に冬桜
探梅の行きつく先の観世音

日脚伸ぶ

斉藤 小夜

落葉踏む過ぎゆく音を聞きながら
逝きし人との交信はいま寒昂
石の窪とびそこねたり初雀
ループタイは肥後象嵌や初句会
ふきのたう生命はここと土を割り
ノートまだ白きがままや福寿草
濡れ椽に鳥のあしあと日脚伸ぶ

しやぼん玉

— 外川 玲子 —

初句集上梓明りてのひらにのる二十年
冬三日月道をはづれず落ちにけり
凍蝶に旦暮のおもひかぶせ置き
送られし榎櫃の匂ふ四畳半
棲む町のクリスマスイズすぐ果つる
神のわざ霧氷の光散らしけり
手のとどく雪嶺人を拒みけり
空つぼのころに摘んで露の臺
夫の忌や押し寄せてゐる冬夕焼
眠るまで流れし曲やあたたか

オリオンの冴えて鍵音とばしけり
牡丹の芽ほつほつ風にあまき日よ
春暁のうすむらさきに目覚めけり
それぞれに空があふれてしやぼん玉
水明りして林中の座禅草
早春のいろおのづから沖に雲
三月の海を見てゐる誕生日
音になる笑顔のありて梅咲けり
風船に逃げられてゐて空深し
山の日の遠くて小さし西行忌

山河集

同人作品



神蔵
器選

寿福寺に俤屋のゐる四日かな
青々と虚子の矢倉の冬の草
虚子聴きし笹鳴かとも耳立つる
殖え続く千両万両終の家
倒立を繰り返す鴨倣ふ鴨

落合 絹代

護摩焚かる槽に新芽の吹いてをり
石段を百まで数へ初詣
へらへらと沈みゆく皿水温む
春の雨地に芯あるごとく吸はれ
下萌えのベンチにスケッチブックかな

池田 光子

初暦姪の結婚式を記す
福寿草改札口に花ひらく
買得の夕餉の蛸や寒の入り

竹生田勝次

初旅の妻南国へ送り出す
校長の雪搔く門を兎等通る

栗林 房子

日の差して香むらさきに淑気満つ
年は逝く櫂通りの上にかな
八十路かな初鶯の登り口
立ち止まり立ちどまりつつ恵方径
お降りのおしめりほどの菜畑かな

高野 明子

凍道を歩く気くばり暮れなづむ
かつぎ女の新聞紙から寒卵
寒天を晒し山脈風を生む
神の御手時に厳しく大氷柱
飛梅や蕾の堅さ筆供養

風土独語／神蔵 器



鶴川の雪を泣かせて釜の噴く

橋添やよひ

一月二十二日は「風土」の新年会で、やよひさんは一日早く上京、まれに見る大雪の鶴川駅に降りたつた。武相荘までは歩いても十五分位。戦後開発が進み、山は崩され団地となり、田畑は埋められ住宅が建ち並んでしまった。能ヶ谷も昔の面影は大方消えてしまったが、白洲邸は多摩丘陵の南端、僅かに開発をのがれた山の麓に、昔の茅葺の農家をそのままに建っている。「大雪が還す鶴川村能ヶ谷」桂郎の昭和四十二年の作品である。

武相荘は玄関を入ると、昔の農家の広い土間が生かされ応接セットが置かれ、応接間の右側が南縁に添って表座敷、奥座敷とつづいている。この表座敷が十五畳の間で囲炉裏が切つてある。囲炉裏の縁は伏見の骨董屋から正子が気に入って買い求めたもの、自在鉤は柳宗悦から贈られたものという。まれの大雪の日とこので、この炉に火が入ったかも知れない。しかし武相荘になつてからは絵瀬戸碗（江戸）、瀬戸麦藁手鉢（江戸中期）など陶器や茶道具などの展示室になつていたので接待は期待できない。考えられ得るのは長屋門に入る手前の右側にある休憩処である。ここには表座敷の炉とは違うが一回り大きい囲炉裏が出来ている。

さて掲出句の「雪を泣かせて」は、もつとも普通の解釈をすれ

ば、はるばる京都より上京して大雪の武相荘を訪ねる心の昂ぶりが、一步一步にも力が入ってきゅうきゅう新雪を泣かせる。それがまた新鮮で、初めて武相荘を訪うゆめをふくらませる。これは作者側にポイントを置いた見方である。私はこの句の場合、あえて作者側より対象側の方にポイントを置きたい。

桂郎に「雪を煮て面剃るものを揃へけり」があるが、正子さんが雪を沸かして茶の湯を楽しんだとしてもおかしくないだろう。能ヶ谷はその頃まだ水道は無く、噴井か、山にしみ込んだ水を厨の大甕に引いて生活に使っていた。

何れにしても「雪を泣かせて」は、戦争による疎開であつたとはいへ、生涯隠れ里のような鶴川の自然を愛し、心の贅沢に徹して生き抜いた正子のちらつと見せた含羞ではなかつたらうか。

寿福寺に俵屋のゐる四日かな 落合 絹代

寿福寺がよい。寿福寺は鎌倉五山の第三位であるが、たとえ一位の建長寺、二位の円覚寺をもつても「俵屋がゐる四日かな」は生きないしさまにならない。

正月三ヶ日は寿福寺も、それなりに人出が見られるであろうが、四日ともなれば、墓地の方へ訪れる身内らしい人が三々五々、俵屋ものんびりと客を待っている。

かつぎ女の新聞紙から寒卵 高野 明子

飯田蛇笏の句に

大つぶの寒卵おく襦袢の上 蛇笏

がある。昭和十年の作であるが、私が知ったのは戦後昭和二十四か五年頃で、結核で療養中であった。大つぶの寒卵、おそらく放し飼の鶏のものである。檻樓の上におかれた一つぶの大きな寒卵の白き輝き、あふれる生命感に圧倒されたものである。

掲出句はかつぎ女が持って来た寒卵、おそらく週に一度か二度きまって回って来るかつぎの行商女で、明子さんのお宅は上得意、自分の家で放ち飼いをしている鶏の寒卵を丁寧に古新聞にくるんで大事大事にもって来た。蛇笏の句は寒卵だけで勝負、寒卵は全生命であり、宇宙そのものである。明子さんの句は蛇笏の透徹した凄さはないが、いのちのあたたかさ、頼母しさがあがる。

へらへらと沈みゆく皿水温む

池田 光子

お皿は垂直には水に沈まない。水に当る面積が広く水の抵抗を全面に受けるので、皿自体の重みと相拮抗して右に左に大きくゆれ、まさにへらへらと沈んでゆく。水の温度にさして関係はないと思うが「水温む」は炯眼、感覚的にすぐれた把握である。

福寿草 改札口に花ひらく

竹生田勝次

これぞ俳句。福寿草は改札口で急に花を開くものでもないが、あたかも通行手形のごとく福寿草の花の笑顔で改札を通過する。改札の先には暖かく幸福な家庭があり、さらにその背景には壮大な雪嶺のつらなる山脈の輝きなどが見えて来るではないか。

爪赤く人日の橋渡りをり

浅田 光代

もともと中国から来た呼び方で、一月七日は人に当たっている。爪を赤くマニキュアして人日の橋を渡っても別にどうということはない。しかし万物の霊長たる人間として、はたしてふさわしい行為なのであるか。これがファッションであり文化人だとするなら、人間であることもつまらない。自分を含めてちよっぴり反省と皮肉、諧謔的な句だ。

寒晴れの吉兆縄屑池に浮く

武久 昭子

この池は円山公園の池。吉兆縄といえは白朮（せきけ）詣りの吉兆縄である。大晦日の夜、八坂神社の堂前の篝火を吉兆縄に火を移して、消さぬようにくるくる回しながら八坂の闇を戻り、わが家の神棚や仏壇の灯明、雑煮をたく火種などとする。したがって吉兆縄が円山公園の池に浮いているなど考えられない。

しかし事実は途中で火が消えてしまったのか。最悪の凶のお告げをおそれ、燃えのこりの短い吉兆の縄を闇にまぎれてひそかに捨ててしまったのであろう。正月も十日を過ぎた寒晴れの池の端に浮く吉兆の縄は、すでにほぐれて、ただの藁屑となつてただよっているのは凄ましい。

ドンキホーテ現はれさうな枯野かな

遠藤道遙子

ドンキホーテはセルバンテスの長編小説の主人公。今さら私が言うまでもなく、枯野のどこも、槍を小脇に馬を駆使、サンチョ・パンサを従えて現れてもおおかしくない。

風土集



神蔵 器選

白洲邸

鶴川の雪を泣かせて釜の噴く
先づ仰ぐ白佗助や武相荘
待春や正子手描きの百人首
翔つ鳥の音のみ雪の武相荘
東京へつづく蒼空大旦
にぎやかな数となりたる初雀
寒の入りプールの水中歩行かな
巨福山建長寺なり臘梅咲く
松過ぎの野菜しめらす新聞紙
着ぶくれてゐて福音を聞いてをり
寒晴れの吉兆縄屑池に浮く
宵戎南楼門より戻りけり
山車十基収めし蔵や寒の霜
水滴に寒九の水や抱負書く

京都

橋添やよひ

横浜

中村 洋子

伊丹

武久 昭子

去年今年神の火の粉を浴びてをり
美濃尾張雪一枚となりにけり
会席の一座を占めて冬の蠅
読初や『西行花伝』出家の段
円描き蓋の転がる小正月
冬薔薇週に三日の喫茶店
天心に来て寒月となりにけり
一川の怒濤の上の冬の山
妻留守の暗がりばかり冬灯
待春や木の切り口に日が満ちて
板塀に節穴生れ日脚伸び
大寒の厨に赤きうがひ葉
鮫鱈鍋からだほぐれて来たるかな
蕪汁好む齢となりにけり
蹲に臘梅一枝置かれあり

藤枝

間島あきら

上尾

根岸 善行

横浜

池田加代子